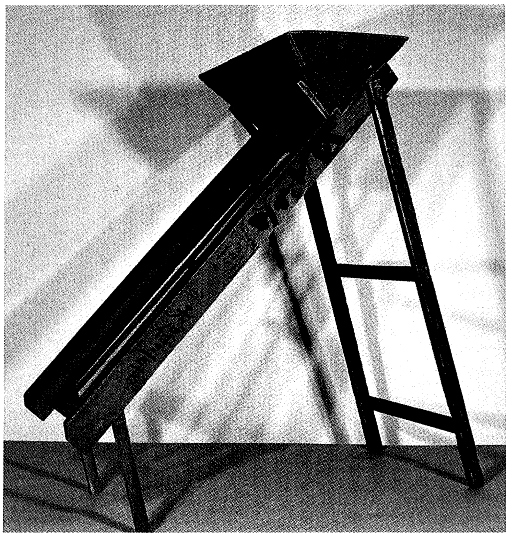
博物館ノート――

農業技術の発達と農民の暮しを語る

紀年銘農具

総合展示近世「会津農書の世界」は、近世の村の歴史を農書や農具等を展示し解説しています。元禄時代（一六八八～一七〇三）は、農書とよばれる農業技術書の出現や、千歯扱き（脱穀用具）や唐箕、万石（選別用具）等の農具の発明など、農業技術の発達した時代です。

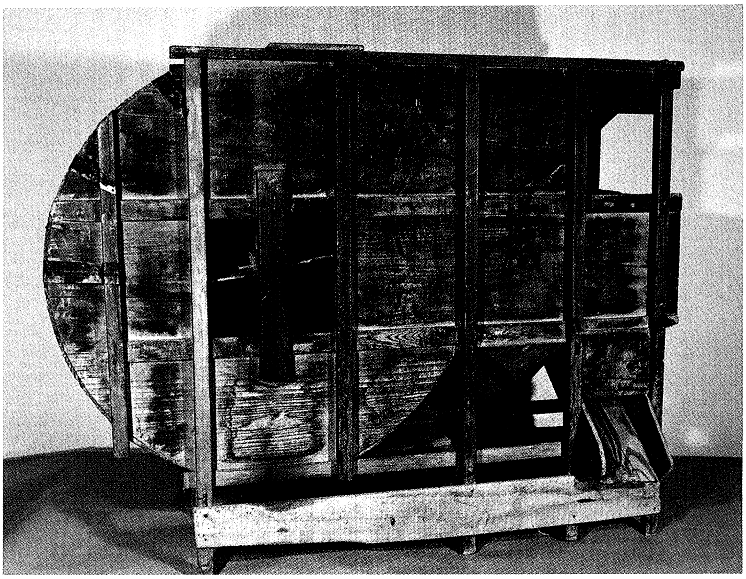
このころ会津地方では、貞享元年（一六八四）に幕内（会津若松市神指町）の肝煎佐瀬与次右衛門によって『会津農書』が著され、当時の農業技術の発達を知ることができます。特に、唐箕使用の記載は、わが国の唐箕使用の最も古い記録です。また、百点あまりの農具の解説もあり、近世における農具の使用状況がわかります。


天保三年銘　万石・金山町

農書や文書に記された農具の歴史を、具体的な「もの」で裏づけるものに、製作年号や購入者・代金などを記した紀年銘農具があります。近年、紀年銘農具の調査が行われ、千歯扱きや唐箕、万石などの使用年代に関する成果があります。以下には、本館に収蔵・展示している主な紀年銘農具を紹介します。

千歯扱きでは、南郷村の天保七年（一八三六）銘のものがあり、これまでの調査では最も古いものです。文献ではそれ以前のものが多々ありますが、会津地方における千歯扱きの使用年代を確定する資料です。唐箕は、京都府に明和四年（一七六七）銘のものが現存しますが、次いで田島町の文化五年（一八〇八）銘のものがあります。これは東日本で最も古いものです。なお会津地方には、選別された穀物の出る樋がなく、唐箕の真下に落ちる「半唐箕」があります。米沢市に天保八年（一八三七）の湯川村北田で製造したものがあります。また、舘岩村の天保五年（一八三四）銘の唐箕は、丹波国の僧が作ったという墨書があり、唐箕の伝播をうかがわせる資料もあります。万石では、金山町の天保三年（一八三二）銘のものがあります。これには「万石師　叶屋常吉」なる焼印もあり、専業職人の存在がわかります。

これらの紀年銘農具は、農書や文書など史料にあらわれた農具の歴史を「もの」で確定する客観的資料として貴重な文化財であると言えます。


文化五年銘　唐箕・田島町

企画展「東国のはにわ」開催中
10月8日～12月11日
常設展無料開放日
11月3日　文化の日
（企画展は有料です）